

●ギリシャ悲劇 『オイディプス王』研究 (2018)

【この作品について】

- ・古代ギリシャ三大悲劇詩人の一人であるソポクレスが、紀元前427年ごろに書いた、2400年前の戯曲。
- ・ギリシャ悲劇の最高傑作。
- ・アリストテレスがその著『詩学』で絶賛。
- ・フロイトの「エディプス・コンプレックス」の語源。
- ・「悲劇」というジャンルの定義は、例えば、アリストテレス『詩学』に下のようにしめされる。

「悲劇とは、一定の大きさをそなえ完結した高貴な行為、の再現 (ミメーシス) であり、快い効果を与える言葉を使用し、しかも作品の部分部分によってそれぞれの媒体を別々に用い、叙述によってではなく、行為する人物たちによっておこなわれ、あわれみとおそれを通じて、そのような感情の浄化 (カタルシス) を達成するものである。ここで快い効果をあたえる言葉とは、リズムと音曲をもった言葉のことを、またそれぞれの媒体を別々に用いるというのは、作品のある部分は韻律のみによって、他の部分はこれに反し歌曲によって仕上げることを意味する」

～アリストテレス「第六章 悲劇の定義と悲劇の構成要素について」『詩学』岩波文庫、1997年、34頁。

=====

【あらすじ】

物語の舞台は古代ギリシャのテーバイ国 (現在のギリシャ共和国ティーヴァ市) 。  
物語がはじまる時点で、主人公のオイディプス (「ふくれ足」の意味) はテーバイ国の王である。  
彼は、王女イオカステを妻とする二男二女の父であった。

オイディプスの生い立ちは、しかし、複雑であった。  
彼自身の認識では、自分は、テーバイで生まれたのではなく、  
別の国、コリントス国の地で生まれたのであり、  
当時のコリントス王、ポリボスのもとに生まれた王子であった。

ある日、彼はコリントス王ポリボスの実子ではないとする周囲の噂を聞き、この件を預言者に相談した。  
この時、預言者は驚くべきことを、オイディプスに予言する。  
預言者によれば、オイディプスは、いずれ 父親を殺し、さらに母親と交わって  
子をもうけることになる宿命を持つというのである。

自らの忌まわしい宿命に驚いた少年期のオイディプスは、  
その宿命が実現することを避けるために父母 (コリントス王ポリボス と王女) と離れるべく、  
自らコリントス国を去ったものであった。  
したがって、オイディプスにとっては、あの宿命は、  
自分がコリントス国にいない限り、決して実現するはずのないものであった。

コリントスを離れたオイディプスは、諸国放浪の過程で怪獣スフィンクスを倒したことから、勇者として名声を得る。  
名声を聞いたテーバイ国は、この勇者オイディプスを国内へ迎え入れることとした。  
なぜなら、その時点で、先代のテーバイ国王ライオスは何者かに殺されたため、王が不在であったからだ。  
当然、王女イオカステは未亡人であった。  
そこで、勇者オイディプスは、テーバイ国の新たな国王となり、  
そして、未亡人であった王女イオカステと結婚した。  
この物語が始まるまでに、このような背景であった。

劇は、テーバイ国王オイディプスが、近年、テーバイ国内にふりかかる謎の災いに悩む所から始まる。  
その災いの原因が、過去に起きた事件、先代のテーバイ国王ライオスの殺害事件に起因すること、  
そしてさらに、その殺人犯は、いまだ国内にいることを預言者によって知る。

そこで、オイディプスは、テーバイ国を災いから救うために、  
先の国王殺害犯を処刑すべくテーバイ国内を搜索する。

しかし、搜索が進むほどに、その殺人犯、つまり先代テーバイ国王を殺した犯人が、  
あるいは、オイディプス自分自身かもしれないことが否定し難くなる。  
実は、オイディプスは、かつてコリントス国を離れ、諸国放浪していた時、  
ある男を殺した過去があった。

自らが殺人を犯したかもしれないと思うオイディプスであるが、  
妻イオカステをはじめ、周囲は、彼を安心させようとして、  
様々な情報をオイディプスに与える。

しかし、そのような情報を得るごとに、  
オイディプスは、自らが、単に、先のテーバイ国王ライオスを殺しただけでなく、  
同時に、自らが予想だにしない出生の秘密を持っていることを知り始める。

最初にその恐ろしい事実の全てに気がついたのは、妻イオカステであった。

はたして、オイディプスの出生の秘密とは？ オイディプスの本当の父母とは誰なのか？  
そもそもオイディプスが生まれたのは、彼自身の記憶のとおり、本当にコリントス国であったのか？  
かつてコリントス国で聞いた予言と彼の人生との関係は？  
オイディプスはなぜ「ふくれ足」という意味の名がついているのか？  
過去に彼が殺めたのは誰だったのか？  
妻イオカステとは？

すべてを知ったオイディプスは、いかに自らの身を処すのか？

---

## 【主要登場人物】

### ●( テーバイ国に由来する人 )

- ・ライオス(男) = テーバイ国の先の王 ( 実際はオイディプスの実父)。\* 劇中には登場しない
- ・イオカステ(女) = テーバイ国の王女 (実際はオイディプスの実母)。麻美しい。
- ・クレオン (男) = イオカステの弟 (ライオスの死後、国をまとめる摂政)。吉田鋼太郎。
- ・テイレシアース(男) = 預言者。
- ・アンティゴネ (女) = オイディプスとイオカステとの娘の一人。

### ●(コリントス国に由来する人、由来するはずであった人 )

- ・オイディプス (男) = 現在のテーバイ国の王 。野村萬斎。  
彼自身の認識では、自分はコリントスに生まれたはずであり、  
その後に国外にでて、現在はテーバイで国王になったと信じて疑わない。  
オイディプスとは「ふくれ足」という意味。
- ・ポリボス王 = コリントス王国の王。劇中で逝去したことが伝えられる。  
オイディプスは、このコリントス王ポリボスこそ実の父親だと信じて疑わない。  
\* 劇中には登場しない

---

## 【参考】

### ●しんたく【神託】

神が自分の判断や意志を巫女(みこ)などの仲介者、あるいは夢・占いなどによって知らせること。  
神のお告げ。託宣。「ーが下る」 (web goo辞書「神託」より)

古代ギリシャでは、人生の迷いや手に負えない問題があるときは、その解決のため、  
パルナッソス山のふもとにあるデルフォイの地の「アポローン神殿」に赴き、  
その神殿の巫女が、アポローンに代わって、陶酔する状態の中で伝える神託 (神の預言) を受けて、  
それを解決の指針とする慣習があった。  
その際、神託は、当時のギリシャの人々にとって、神が告げる、  
疑いようのない絶対の真実として受け取られていた。

プラトンが著した『ソクラテスの弁明』のなかでも、このデルフォイの神託に関する有名な件がある。ソクラテスの親友カイレポンが、デルフォイにて「ソクラテスよりも知恵のある者はいますか？」と尋ねたとき、巫女は「ソクラテスよりも知恵のあるものはいない」ことを示した。自らの知の限界を知るソクラテス自身は、絶対的真実であるべきこの神託の意味が理解できず悩むが、結局、世の知者が知に慢心しているのに対し、ソクラテスは「自分は何も知らないということを知っている」点で、すくなくとも他よりも優れていることを悟る（「無知の知」）。

- ティーヴァ市（この物語の舞台テーバイの現在）ギリシャ共和国ヴィオティア県ティーヴァ市。  
「（古代ギリシャにおいて）アテナイやスパルタと覇権を争った最有力の都市国家のひとつである。また、多くの神話の舞台としても知られる」（「<http://ja.wikipedia.org/wiki/ティーヴァ>」より）

=====

#### 【本日使用した DVD】

「オイディプス王 アテネ公演」、蜷川幸雄(演出)、野村萬斎・麻実れい(主演)、  
発売：角川エンタテインメント、2005年。

- ・メイキング映像部分\_10分 (一部編集)
- ・本編\_120分 (未編集)

(以上)